

# くらしの明日

私の社会保障論

大熊 由紀子

国際医療福祉大大学院教授

# ユーマア精神で新たな試み

## 「自分の助け方」当事者が研究

怖いイメージのある幻聴を「幻聴さん」と親しみをこめて呼ぶ北海道浦河町。この町の社会福祉法人「べてるの家」が開いている「べてるまつり」は浦河が今夏、第20回を迎えました。

浦河は「何も無い春です」の歌で有名な襟裳岬の近く。交通は不便の上なのですが、海外も含め、年間延べ2500人もが訪ねてきます。

「べてるの家」は約30年前、精神科病棟を退院した数人とソーシャルワーカーの向谷地生長さんが始めた昆布の袋詰め作業から始まりました。今は10代から70代まで100人あまりの住まいや仕事、仲間の婚活や子育て支援を手掛ける拠点になっています。最大の魅力は、一見、精神病とは対極に見えるユーマア精神です。

べてるまつりのメインイベント「幻覚&妄想大会」では、ユニークな体験をした人が表彰されます。今年グランプリに輝いたのは「焼き鳥は動物虐待である」という妄想的「愛の信念」に基づき、焼き鳥屋の赤ちょうちゃん撲滅運動の先頭に立ち、ちょうちゃんにパンチを食らわせた「天使のような」女性。賞品として「天使の羽一式」が贈られました。

ここでは症状に合わせて、自分でオリジナルの「病名」を考えます。首相と恋仲になり、身体の一部が勝手に首相官邸

に飛んでいく「統合失調症ドラマチック型」、考えていることを他人に知られてしまう、と恐れる「統合失調症サトラシ型」……。

こうした「生きづらさ」を持ち寄り、仲間と一緒に「自分の助け方」を見つけていこう、という「当事者研究」が01年から始まりました。「苦勞を専門家や家族に丸投げせず、自ら『苦勞の主演』になる」という理念に基づいています。

べてるの家の当事者研究の本は海外に向けて翻訳され、当事者による活動は全国に広がりました。10月には福島で、第9回当事者研究全国交流集会が開かれます。

東京・世田谷の作業所「ハーモニー」では、利用者が「幻聴妄想かるた」を作り、大人気商品になりました。本人の苦しみをカルタにすることで「訳のわからない人」を「こういうことに困っている人」という具体的なイメージに変えようとする試みです。この試みが評価され、ハーモニーには11月、「新しい医療のかたち賞」が贈られます。

「安心してサボれる職場づくり」「偏見差別大歓迎」「弱きを絆に」――。べてるのモットーには、ハツとさせられる響きがあります。日本生まれのこの挑戦、精神科を超えてさまざまな分野に広がる予感がします。

### 新しい医療のかたち賞

患者本位の医療をめざす「新しい医療のかたち」を指し示す活動を、医療の質・安全学会の委嘱をうけた委員会(9人の医療ジャーナリストで構成)が選考。第6回の今年も、患者発の「ハーモニー」のほか、医療者発の東京・新宿の「暮らしの保健室」と地域発の滋賀県東近江圏域の「三方よし研究会」が選ばれた。



＝矢頭智剛撮影

「くらしの明日」は毎週金曜日掲載。次回は湯浅誠さんです